

# 基調講演・大会企画パネル・ワークショップ概要

## ファミリー・ランゲージ・ポリシー(Family Language Policy)研究とは

ファミリー・ランゲージ・ポリシー (Family Language Policy, 以下 FLP) 研究は、子どもの言語習得と、言語政策という2つの領域をベースに、これらミクロレベルとマクロレベルで起こる現象の相互作用を考察しつつ、近年ではより多彩なトピックを包含して発展しています。FLP 研究動向は、「子どもの言語力」という「結果」に着目するものから、次第にバイリンガリズム・マルチリンガリズムを「プロセス」「経験」としてみる方向に変化しており、従来の西欧的核家族モデルにおける親の視点を中心とした研究から、当事者である子どもの視点を反映したものや、非西欧的文脈における FLP に着目した研究が増加する傾向にあります。FLP は言語文化の多様性に直結することから、“family”こそが子どもの言語習得に多大な影響を及ぼす動的な場であるにとらえており、ここから、言語少数派の家庭内でいかに容易に主流派言語への移行が促進されるか、そしてそれは個人や一家族レベルを超え、社会集团的・国際的な要因といかなる相互作用を持っているか、など多くの興味深い分析・提言を行っています。

コロナ禍にある今、FLP 研究は私たちが直面している様々な不安や不均衡な社会状況に向き合い、これまでに受けてきた批判や限界を乗り越えようと、研究方法、研究の焦点、研究課題において新たな方向を見出しポストコロナ時代に向けて発展を続けています。大会では FLP 研究を牽引してこられた Kendall King 博士を基調講演者にお迎えし、FLP 研究の最新の動向に加え、コロナ禍という困難な時代に私たちが直面する喫緊の諸問題について FLP 研究が「家族」という単位を通じてどう応えようとしているかについてお話させていただきます。

## 基調講演

**Family language policy: growing pains and new directions in post-COVID times**

**Kendall A. King, Ph.D.  
Professor, University of Minnesota**

Over the last decade, a large and diverse body of research has coalesced under the banner of ‘family language policy’ (FLP). This talk reviews recent advances and developments in FLP research, considering critiques of the field, growing pains and new directions. Important critiques include limitations of who participated in past studies, what counted as ‘family’, and how that data was collected and analyzed. As FLP researchers advance their work in post-COVID contexts, these growing pains have prompted new directions in methodology and focus as well as new questions. These include: ‘What will the impact of extended quarantines be on child acquisition of home/heritage languages and on school/societal languages?’, ‘How does now near ubiquitous video technology shape who we interact with and how?’, and ‘What will be lasting impacts on educational equity given the uneven access to services that have defined the pandemic in many contexts?’ Indeed, questions of family language policy seem all the more crucial in light of the myriad social, economic and psycho-emotional crises brought on by the COVID-19 pandemic. Worldwide, COVID-19 quarantines have centralized the family unit, but simultaneously put it under huge stress, threatening if

not reversing the gains of recent decades in gender, economic, and racial equality. As this talk demonstrates, the pandemic and the social, cultural and economic shifts it entails, has made FLP more relevant, central, and crucial than ever.

ファミリー・ランゲージ・ポリシー：「成長に伴う痛み」とポストコロナ時代における新しい方向性

ケンドール.A. キング博士（ミネソタ大学教授）

この10年間、「ファミリー・ランゲージ・ポリシー」（Family Language Policy; FLP）という旗印のもとに、様々なタイプの多くの研究が蓄積されてきました。この講演では、FLP研究の近年の発展と進歩を振り返り、この分野に対する批判、分野が成長するために乗り越えなければならない問題、そしてそこから見えてきた新しい方向性について考えます。重要な批判としては、過去の研究対象者に関する限界、何を「家族」とみなしたか、そしてデータの収集と分析方法などが挙げられます。FLPの研究者がポストコロナの状況下で研究を進めていくにつれ、こうした当該分野の発展のために避けて通れない課題は、方法論や研究の焦点における新たな方向性、新たな研究課題への取り組みを促しています。例えば、以下のようなものです。「長引く隔離期間が、子どもの母国語／継承語や学校／社会の言語の習得に与える影響はどのようなものになるか」、「いまや至るところに存在するビデオ技術は、私たちが交流する対象とその方法をどのように形作っていくのか」、「多くの文脈でパンデミック故に提供されている社会サービスへの不均等なアクセスは、教育の公平性にどのような永続的な影響を与えるか」などです。実際、新型コロナのパンデミックがもたらした無数の社会的、経済的、精神的な危機を考慮すると、ファミリー・ランゲージ・ポリシーに関する問題は以前よりさらに重要性を増していると思われます。新型コロナ感染拡大による隔離は、世界中で「家族」という単位を中心的なものとしましたが、同時に「家族」に非常に大きなストレスを与え、ここ数十年間に成し遂げられたジェンダー、経済、人種の平等における成果を、覆すまでにはならないとしても、脅かすほどになりました。この講演が示すとおり、パンデミックとそれに伴う社会的、文化的、経済的な変化により、FLPはこれまで以上に現実的な課題と直結し、中心的で極めて重要な分野となっています。

## 大会企画パネル

「国内外における FLP 研究の実際」

- パネリスト1 「子どもによる FLP 解釈と創造的言語使用  
—イギリスの継承日本語家庭における実践例—」  
段上知里（ヨーク・セント・ジョン大学）
- パネリスト2 「ダブル・マイノリティ・コンテクストにおける日本語の継承  
—カタルーニャのケース—」  
福田牧子（バルセロナ自治大学）
- パネリスト3 「日本を文脈とした言語政策研究と FLP 研究の可能性  
—英語を家庭言語としない国際結婚家庭を中心に—」  
本林響子（お茶の水女子大学）
- 総括 横井幸子（大阪大学）

MHB 学会は、様々な関連対象領域で研究、実践をする人々が集まっていることが、特徴

の一つです。「ファミリー・ランゲージ・ポリシー (Family Language Policy: FLP) を大会テーマとする本大会では、Kendall King 氏による基調講演に加え、この大会企画パネルでも、海外や国内において日本語を使用するコミュニティーに見られる FLP の実践と、それらに関する研究を紹介します。これを通じて、学会員や大会参加者がそれぞれの実践や研究と照らし合わせて FLP について考えるとともに、その課題と可能性について議論を深めることを目的としています。

## ワークショップ

### ワークショップ1 「言葉のデータに翻弄されないためのオープン・コーディング入門」

講師：日高友郎（福島県立医科大学）

対象者の思考、意味、そして価値観などに深く迫ることを意図した研究や実践においては、データを「言葉」として収集・分析することが行われる。一方、言葉のデータの分析においては、データに翻弄されるような感覚を持つこともある：いざデータ収集をしてから分析方法がわからず困惑する、分析結果が本当に適切か心配になる、分析作業に楽しさを感じられない、といった悩みが付き物である。当企画においては、言葉のデータ（質的データ）の分析方法の一つである「オープン・コーディング」入門と題し、具体的な語りやフィールドノーツの記載をまとめあげ、抽象的な概念の形に置き換えていくための基本的な技法を学ぶ。他の質的データ分析技法との異同ならびに分析結果の見せ方についての解説に加え、練習用データをもとにした実践的ワークも行う。これらを通じ、「既存の概念への分類作業」ではなく「新たな視点・概念の生成」に繋がる分析方法の習得を目指す。

### ワークショップ2 「LINE から始めるコロナ禍の教育デジタルツール選択と利用」

講師：岡本清美（大阪大学）

新型コロナウイルス感染拡大により、2020 年春以降、世界中の教育機関が有史以来の対面中心の教育からオンラインを主とする非対面への移行をせざるを得ませんでした。期せずして同じく 2020 年春に「デジタル時代の教育」という図書の日本語訳版が刊行されました。この本の冒頭に「教員たちは前例のない変化に直面している」とありますが、こんなに急に大きな変化が、教員・学習者双方ともに有無を言わさない形で起こるとは誰も予想していませんでした。また、休校措置など教育機関を取り巻く状況が日々変わるだけでなく、Zoom など既存のデジタルツールの進化や新しいツールの出現も続く中、いったい何をどうすればいいのかお悩みの先生方も多いことでしょう。本ワークショップでは、おなじみの LINE などいくつかのツールの紹介や体験という「すぐに役立つこと」だけでなく、先生方が今後の状況変化に対応できるよう、上記図書で紹介されている、教育におけるツール（図書内では『メディア』）選択と利用に関する枠組み「SECTIONS モデル」についても紹介いたします。